

SA から眺めた SA 制度の課題

藤田 菜摘[†]

立正大学 地球環境科学部

[†]fujita.natsumi8611@gmail.com

キーワード SA, スチューデント・アシスタント, SA 制度, 廣中レポート

1 はじめに

スチューデント・アシスタント（以下、SA）制度導入の端緒とされる「大学における学生生活の充実方策について（報告）」（[1] 通称「廣中レポート」）では、大学進学率が 50% に迫り、多様な学生が存在する中で、学生に対するきめ細やかな教育・指導に重点を置く「学生中心の大学」へと、視点の転換を図ることが重要であると、学生の活用について（[1]II.(2)）『ティーチング・アシスタント（TA）のように授業の補助を行うだけではなく、（中略）学生を学内における様々な業務にたずさわらせるなど、各大学においてその範囲や方法を検討した上で、学生を有効に活用する工夫が期待される。その際、大学としては、学生が自立した人間として成長するための訓練として、学生に一定の責任を持たせることが重要である。それと同時に、学生に対し、必要に応じて研修やガイダンスを積極的に行い、自覚を促すとともに、学生に対する期待と信頼を寄せていく姿勢が求められる。』と報告されている。

立正大学では、2014 年度から全学で SA 制度の運用を始め、全学の必修科目「情報処理の基礎」（演習を併用した授業）において情報 SA 学生を採用している。この情報 SA については、「インストラクタ」という名称での前身があり 1987 年度から制度は始まっていた。

この SA 制度は、全学的には情報 SA、体育 SA 等が運用されており、他種 SA についてはガイドライン（[4]）の下、各学部で独自に採用・運用されている。著者等が所属する学部では、FW や実験・演習授業においても TA だけでなく積極的に SA 制度を利用している。

SA 制度については、日米の SA 制度を比較した（立山 [6]）、先行事例として全学的に SA を導入している関西大学の事例研究（竹中 [5]、岩崎 [10]）や、SA 制度や SA の能力に関する研究（時任 [3]、西村 [7]、高田 [8]、森田 [9]）等があるが、いずれも研究者や教員側の視点に基づき授業の質的向上や受講生に対する効果に焦点を当てたものである。

SA 制度は「教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に付けることができることにもなり、非常に意義深いものである。」（[1]）として提起されている。

著者は「情報処理の基礎」の情報 SA を 3 年間務め、また集中講義の FW 科目「学修の基礎 II」でも SA を務めた。SA 制度が「教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に付けることができることにもなり、非常に意義深いものである。」（[1]）として提起されたことを踏まえ、本稿では立正大学の SA 制度は SA の学生にとってどのような意義を得られるような仕組みであるのかを起点として、他 SA へのヒアリングや著者の経験を元に、学生 / SA の視点から見た SA 制度の現状と課題について述べる。

2 立正大学での情報基礎科目及び SA 制度

2.1 立正大学での情報基礎科目

本学での「情報処理の基礎」は社会で必要とされる基本的な ICT リテラシーを身につけることを目標としている。全学での（初年次）必修科目であるが、学部学科によって授業内容、特にその中で展開される演習内容はかなり異なっている。それは求める ICT リテラシーやスキル観に差異があるためである。

2.2 情報 SA 制度

立正大学 SA 制度の運用に関するガイドライン（[4]）では、SA について次のように規定されている。

SA：主として授業における教育効果を高めるため、授業担当者が授業中に行わねばならない軽微な業務を補助したり、授業担当者が単独では手が及びかねる業務について補助を行う学生を指す。しかし、単なるアシスタントではなく、学生が教育補助業務に従事することを通じて、学生相互の成長等学士課程の充実を図ることを目的とする制度である。

SA の職務：SA は「授業の教育効果を促進する」こと

を目的に配置するもので、あくまでも授業の運営全般に判断と責任を担う教員を「サポートする」ことを職務とする。SA の具体的な職務内容は次のとおり。

- ・授業時に配布する資料等の印刷補助
- ・授業時に利用する教育機器の事前準備とその利用補助
- ・出欠調査の作業補助
- ・資料等の配布補助および回収補助
- ・授業進行の確認補助

他に、各授業の性質に応じて求められるべき具体的な職務内容や、授業の効果・効率を高め質的向上につながる支援について希望・提案がある場合は、事務局管部局担当者のほか各学部教務委員会または教務委員長まであらかじめ相談のこと。但し、SA は授業担当教員に代わり授業中の専門知識や技術を指導するような職務は担えない。

SA の任用は自己推薦と教員推薦の2方式があり、学生のGPAや適性、INFOSS情報倫理の成績等を考慮し、最終的には教務委員会で決定される。

2.3 担当授業の内容と運営

担当授業（担当教員：山下）は次の通り。

- ・授業期間 2015–2016年度：1期1時限15週，2017年度1期2時限7.5週・受講人数 2015–2016年度：60人，2017年度：42人
- ・情報SA数 2015年度：2人，2016–2017年度：3人
- ・授業内容 講義，演習（Officeソフト，TeX，html+js），eラーニングコンテンツ5種，LMS（WebClass）併用
- ・SA業務 授業前打合せ，ビデオ収録（2台），机間巡回（学生からの質問・操作エラー対応），出欠チェック，課題発表チェック（ループリックあり），日報作成

3 歴代SAへのヒアリング調査

SAがどのような気持ちで授業に望んでいたのか調べるためアンケート調査を歴代SAへ行った。人数は筆者含め6名である。設問とその回答は以下の通りである。

設問1 情報SAを志望した理由は（推薦されたこと以外には）何がありましたか。

- ・空きコマの時間でバイトが出来ること。SAは業務経験として履歴書に書けること。
- ・アルバイトとして、就活などでアピールポイントとして
- ・パソコンを操作する事が好きなので、SAをやってみようと思った。

- ・1年生のサポートをする中で自分自身が理解できているかを確認し、理解不足なところは1年生と一緒に学ぼうと思い志望しました。
- ・良い経験になると思ったから
- ・授業を補助する立場を経験し、コミュニケーション能力を培うことができると思った。

設問2 情報SAを終えての感想（自由に記述）

- ・人に教えることの難しさを実感した。また各種の授業で使ったソフト、特にTeXに関しては非常に理解が深まった。
- ・担当した範囲では滞りなく終わったが、朝早いため居住地などである程度人を選ぶのではないかと思った
- ・他人に教える事で、今までとは違った視点からも見る事ができ、自分自身も成長する事ができた。また、以前まで自分が理解できなかった事が、理解できるようになったことを実感できて嬉しかった。
- ・授業をサポートするためのSAでしたが、教えたことよりも教わったことの方が圧倒的に多く勉強になりました。
- ・難しく、大変だと思ってたが、教えられないところは先輩や先生に聞いて、基本的には自分だけで教えられることができたので良かった。

設問3 情報SAを経験することでどのような学びを得られたか。（例：授業内容をより深く理解することができた。教える立場として授業に関わり、授業運営手法を多角的に経験することが出来た。）

- ・先生側、教える側の相手にどうやって伝えるかの難しさを感じた。学生からの質問で自分の理解が不十分であるところがはっきりし、より深い理解に役立てる事が出来た
- ・授業内容の一層の理解と今まで他学年との関わりがなかったのでその接し方など
- ・一度習った授業をもう一度学習する事ができたのでより深く理解する事ができた。人にわかりやすく伝えるスキルも身につけられたと思う。
- ・授業はSAを経験する中で、私が1年生の時よりもSA1回目、1回目よりも2回目とより理解できている実感がありました。自分が授業を受けたときは「なぜそうなるのか」という理由・理屈までは考えることができませんでした。SAとして教える中で「理由」を理解し、それが他の

どんなことと結びついてくるのかを考えながら教えることが出来たと思います。

- ・ 去年は自分でできるようになるため学習していたが、SA では教える立場になるので、内容を2倍学習でき、困っている子には、やり方を教えるだけでなく、自分でできるようにどうすべきか考えてやるべきだということが分かった。
- ・ 1年前に受けた授業の内容を振り返り、他人に教えるようにすることで理解を深めることができた。そして、新たに学ぶこともあった。

設問4 情報SAを経験して良かったと思われる点

- ・ 授業で使用するソフトの扱いが上達したこと。教える側の視点が分かったこと。
- ・ 設問1&3の内容が得られたこと
- ・ SAを担当する前よりパソコン操作に詳しくなった。他のSAの方々とも交流する事ができたので、新しい繋がりを持つ事ができた。
- ・ 設問3のように「より理解が深まった」ということが一つ。また3年生となり中だるみしがちな時期に、1年生をサポートするという形で授業に参加させて頂いたことで自分が入学したころを思い出し、モチベーションが上がったことが良かったです。
- ・ やり方だけでなく、どういう場合にそれを利用するかとか、教えることを考えながらやれたこと。
- ・ 自身の積極性が磨かれた。

設問5 情報SA 経験の中で、自ら反省すべき点はありましたか。またそれは何だと思えますか

- ・ 質問に答えられなかったり、エラーが解決出来なかったりしたときは自分の勉強や準備が足りなかったと思った
- ・ 質問などがあれば答えたが、こちらから行くことがあまりなかった。講義の邪魔になる可能性があったため
- ・ 生徒にわからないところを聞かれた時に、自分だけでは教えられなかった点。パソコン操作についての知識をもう少し身に付けたいと思った。
- ・ 実習を手伝い過ぎてしまった時は反省しました。
- ・ 分からないとき、先輩や先生に代わってもらったが、そのとき自分も一緒に聞いていれば良かったと思う。
- ・ わからないことがあった時に先生や先輩に頼りきりになってしまったこと。事前に質問されそうな

ことや起こりうる問題などを考えておき、対処法を聞いておく。

設問6 情報SAを経験し、SA制度や業務内容で今後改善した方が良いと思われる点は何ですか

- ・ SA制度の知名度の向上。業務内容の明確化と時間外労働(学生からの質問対応や資料、授業準備)に対する賃金の支払い。事前事後の研修会やその内容の意義の明確化及び日程の早い時期からの通知。
- ・ T_EX など対応が増えると予想される単位では他の時間のSAから応援を呼ぶなどで人数を一時的に増やす
- ・ 難しい授業での臨時SAの受け入れが可能になると、より素早く対応できるので良いかと思った。
- ・ 現在はどうなっているかわかりませんが、2年生も情報SAができる制度?があればいいなと思いました。

設問7 60名のクラスでは情報SAは何名が適当だと思いますか。若しくは、何名の受講生に対して情報SA1名が必要だと思われるか。

- ・ 授業の内容によりけりで簡単な内容の場合は2人、難しい内容、質問が多い場合は4-5人欲しい
- ・ 15-20人の学生に対して1人とその他の雑用で1人で4人ぐらい
- ・ 2016年度(60人)では3名が妥当だと思う。ただ、授業内容が難しいと思われる授業(T_EXなど)については3人では対応仕切れない場合があるので、その時のみ5,6人のSAがいてもいいかと思った。
- ・ 授業内容にもよりますが、L^AT_EXやHTMLのときは15-20名に対して1人いたらよかったと思います。MS Officeは高校までで触ったことのある人が多いですが、L^AT_EX等は大学入って初めてやる内容でしたので。
- ・ 学生の能力にもよりますが、2017年度(42人)の場合は3人で妥当だと思う。
- ・ 15-20名に対してSA1人程度。

設問8 授業運営において、情報SA同士の連携内容としてはどのようなものが考えられますか

- ・ メールやライン等のグループを作っていたのでそれで十分事足りた。メールを必要な時に一斉送信するだけでも良いと思う

- ・ SA 全体に流れるメールがあったため特に問題は感じない。強いて言うなら授業後に 15 分程度今回と次回の内容の確認
- ・ 事前に授業内容について、SA 同士で話し合いや復習をしておく事。
- ・ SA に声をかけづらい人もいると思うので、SA から声をかけられるように情報共有が出来たらいいなと思ってました。授業をしている先生では質問してこない人に一人一人対応するのは難しいと思うので。そこまでする必要があるのでどうかは正直分かりませんが。
- ・ 経験者を必ず一人採用し、具体的な仕事内容などの情報を引き継ぐ。他クラスの SA とも情報を共有する。

4 アンケート結果のまとめ

設問 1 の「情報 SA を志望した理由」では、就活のためと自分の経験、学びになるという 2 つの意見に大別できる。

設問 2 の「情報 SA を終えての感想」では、受講生に教えることでより理解が深まり、成長することが出来たという感想がほとんどである。

設問 3 の「情報 SA を経験することでどのような学びを得られたか」では、人にどうやったら分かりやすく伝えることができるのかということとそれにより深い理解につながったという 2 つの意見が見られた。

設問 4 の「情報 SA を経験して良かったと思われる点」では、情報処理のスキルの向上と SA の立場での交流によるモチベーションや積極性の向上という意見が見られた。

設問 5 の「自ら反省すべき点はありましたか」では、自分の勉強、準備不足や受講生へのサポートの仕方についての 2 つの意見が見られた。

設問 6 の「SA 制度や業務内容で今後改善した方が良くと思われる点は何ですか」では、SA の人数を臨機応変に出来るようになれば良いという意見の他に事務手続きや知名度の向上が必要との意見が見られた。

設問 7 の「60 名のクラスでは情報 SA は何名が適当だと思いますか。若しくは、何名の受講生に対して情報 SA 1 名が必要だと思えますか」では、60 名に対し、3 名の SA が適切だが、状況によって増やしてほしいという意見が多く見られた。

設問 8 の「授業運営において、情報 SA 同士の連携内容としてはどのようなものが考えられますか」では、授業前後等に SA 同士での情報共有や経験者を入れること

での経験者の引継ぎ等の意見が見られた。

5 アンケート結果の考察

SA を経験することによって自分が成長出来たという意見がほとんどであった。履修済みの授業において、受講生のサポートを行うことは授業内容のより深い理解だけでなく人に伝える、教えるということに関して大きな成長が期待できることが分かった。反省すべき点での勉強、準備不足に関しては、授業を履修したこと、人に教えるということの間には大きなギャップが存在するため、ある意味当然の結果であると考えられる。このギャップは事前の研修や経験者からの経験者の引継ぎなどを行うことでかなり埋められるのではないだろうか。

6 SA 制度の課題

まず、SA の任用条件の一つに当該授業の既履修生という条件があるが、授業を履修し高い評価を得ていることと、SA として授業現場で質問／トラブルに上手く対応ができるかということには当然乖離がある。SA に対しての事前合同研修が開催されているが、事前に演習内容で想定されるエラー対応や実務的なトレーニングを研修の中でも取り入れることが必要ではないだろうか。

また実際の SA 業務は単純な事務的雑用以外は、質問／トラブル対応に終始している。

一方で、授業運営に関する教員と SA 間のコミュニケーションの悪さで SA に責任の範囲を超えたし寄せがくることもある。

著者にはこの制度は教員の負担軽減にばかり目を向けているように思える。授業担当教員については毎年度しばしば入れ替り新任教員が担当する場合もある。結果、SA 制度や機器操作に疎い教員が存在していることも現実である。

SA 制度は授業運営サポートすることを主目的に運用されているが、教員の機器操作のサポートや受講生に対する注意などは SA の本分ではないはずである。

本学の SA 制度は、2014 年から始まり、2017 年で 4 年目となる。受講生側から見ると有用な制度である。また教員側の授業運営の負担軽減に寄与出来ていると著者や他の SA 等も自負している。だが SA 視点では自分の学びにはなるものの、振り返って自分に大きな成長があったのかと自問した時、必ずしも明確な解答は得られない。大学側は「教える者は学ぶ」という陳腐な言葉で SA 自身の成長を SA に納得させようとしているのかと不安に

なる。SA は（大学の示すガイドラインからは）補助的な業務のみを求められ、受講生の成長や教員の負担軽減になるようなことだけを業務として規定で定めている。これでは、SA の学生自体の成長については副次的なものとしてでしか考慮されておらず、SA に「単なるアシスタントではない」と言いながら、「責任感や誇りを求め」られてもその主旨には納得が出来ない。前提として SA に任用されるのは優秀な学生のはずである。限定された単純補助業務にのみ従事させるのは非常にもったいなく、SA の意見も局所的にしか伝わらない現状では、SA 制度を導入する元となった廣中レポートによる「学生中心の大学」を実現することは出来ないのではないだろうか。

7 経験から考える SA 制度の在り方

著者の 3 年間の SA 経験及び、SA 研修会での議論、コメント等から現行の SA 制度の改善トリガーを列挙する。

- ・ 授業担当教員が必要最低限の機器操作が出来ること（著者の担当した授業ではない）
- ・ 担当教員、SA の双方が SA 制度とその職務について齟齬／誤解なく理解していること
- ・ 授業で予想される質問や必要なスキル、トラブルに対しての対応を事前に研修すること
- ・ SA による提出物の内容チェック（SA の視点からの課題内容や教え方の妥当性の確認及び提案）・授業の一部を担当する（要事前打ち合わせ、教員指導の元）・SA の学生への時間外対応について
- ・ SA の学生対応の責任の範囲の明確な線引き（SA の好意／ボランティア精神に甘えない）
- ・ やる気のない学生や、極端についていけない学生などに対し、どこまでサポートするのか（授業終了後長い時間の質問対応は SA の仕事なのか、サポートに対しての SA の関わり方と教員のそれとは異なるものではないか。SA のオフィスアワー制度を作るのか）
- ・ 学部学科での授業内容／教員／SA のレベルがバラバラであるため、統一した基準／ガイドラインを作ってもあまり意味がない
- ・ 各授業で教員と SA が密に連携し授業運営を成功させてゆくための打合せ時間を確保する

8 まとめ

現状の SA 制度は受講生、教員にとっては有用な制度である。だが、SA からすると廣中レポートで言われている「教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に

付ける」という目的を果たせるような制度にはなっていない。著者から見て運用のガイドラインの条件は、授業の内容や情報 SA の実態に少々そぐわないものである。

この制度の改善のためには、SA の意義や責任範囲の明確化、授業内容や授業運営方法に沿う適切な研修／指導プログラム開発等について、教職員・SA が一体となった組織の中で議論を尽くし、まずは現状を直視した共通認識を醸成してゆくことが必要であろう。

その中で、今後は教員の事務的サポートとしての SA だけでなく、挑戦的な役割を課すことで SA 自身が更に成長できるような制度を考えなければならないのではないだろうか。そうすることにより時代の変化にあった学生中心の大学という目的に近づいていくことが出来ることを確信する。

最後に、担当授業の SA として採用して頂き、本稿を発表する機会を与えて頂いた地球環境科学部・山下倫範教授に感謝致します。

参考文献

- [1] 文部科学省・大学における学生生活の充実に関する調査研究協力者会議、大学における学生生活の充実方策について（報告）-学生の立場に立った大学づくりを目指して、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm, 文部科学省 HP,2017.09.26 参照
- [2] 立正大学情報環境基盤センター、立正大学におけるスチューデント・アシスタント制度-情報 SA 研究会報告・制度発展に向けての課題-, (報告資料), 2017.09.13
- [3] 時任隼平, アクティブラーニング型授業において受講生がスチューデント・アシスタントに求める能力に関する研究, 日本教育工学会論文誌 [ショートレター], 40(Suppl.), 169-172, 2016.04
- [4] 立正大学教務委員会, スチューデント・アシスタント制度の実施に関するガイドライン, (内部資料), 2016.02.24
- [5] 竹中喜一, 学生による教育・学修支援制度の設計・運用における課題-関西大学の事例を中心に-, 神戸大学 大学教育研究, 23, 神戸大学大学教育推進機構, 55-74, 2015.03
- [6] 立山博邦, 大学におけるスチューデント・アシスタント (SA) 制度の考察日米比較の視点から, 社会システム研究, 26, 立命館大学社会システム研究所, 137-150, 2013.3
- [7] 西村悠-古川康一-西山武繁, プロジェクト・マネジメント手法による学生アシスタント制度の改善について-学生アシスタントの育成-, プロジェクトマネジメント学会 2011 年度秋季研究発表大会予稿集, 180-185
- [8] 高田洋, 「データ解析」における TA と SA の役割と機能-受講生アンケートの結果より-, 社会情報, 18(2), 札幌学院大学, 107-115, 2009.03
- [9] 森田修, SA を活用した授業運営-プログラミング演習の場合-, 社会情報, 18(2), 札幌学院大学, 117-129, 2009.03
- [10] 岩崎千晶-久保田賢一-水越敏行, 組織的な授業支援としてのスチューデント・アシスタントの効果と課題, 日本教育工学会論文誌 [ショートレター], 32(Suppl.), 77-80, 2008